

話し合いの視点

最近の授業に「話し合い活動」が多く行われている。話し合い自体は今から7～8年（だったかな？）くらい前から取り入れられてきた。いい活動だと思う。

話し合い活動が話題になった頃、私は、先生が先生の言葉で説明するよりも、生徒同士が生徒の言葉で伝えてもらうことで理解が高まると感じていた。従って、問題演習等で生徒同士の教え合いを多く取り入れた記憶がある。

近年、言語活動が前面に出てきていることから、「ここでは話し合い活動がいらないだろう」と思われる場面でも話し合い活動が行われていることが多い。

例をあげると、

- ・ 1年維管束の形状を見いだす授業

「茎の中にどのように水が通っているか考えてみよう」という課題で話し合いが行われ、その後2種類のプレパラートを観察して、「どのような違いがあるか」を話し合わせている。

しかし、小学校の学習で、色水が茎を通っていることの観察は経験しているので、あまり必要性のない話し合いになっている。また、維管束の形状が異なるプレパラートを観察、スケッチしてわざわざ話し合いしてホワイトボードにまとめて発表を行うことに相当時間をかけている。

こんなことはできないか。2つの形状のプレパラートを3枚ずつ用意し、生徒に観察させ、共通することはないか見いださせる。ここでは個人でよい。そして、先生の指示で葉脈に注目させる。複数のサンプルから複数の視点を結びつけるこの場で班の話し合いを入れることで、必然性ある話し合いに近づくのではないか。先生のちょっとした努力でちがった展開になると思われる。

- ・ 1年根の形状と葉脈の関係を見いだす授業

まず「根はどうなっているか話し合ってみよう」で始まる。その後、実物の根が2種類提示され、観察し、スケッチし、話し合い後に発表が行われる。

しかし、つい3ヶ月前までは小学生だった彼らには、根っこ堀の経験は鮮明で、根の2つの形状はここまで丁寧にしなくてもすぐに出てくる可能性が高い。中学の理科としては、葉脈がわかる葉と根がついた植物を複数用意し、根を観察させて2種類あることを確認し、先生の指示で葉脈を観察させる。根と葉脈の形状を結びつける場面で短時間の話し合いは有効であろう。

つい最近まで小学校の学びを続けてきた彼らに、必然性ある中学校の話し合いを取り入れる例を記した。確認するが、話し合い活動を行っているのではなく、理科の授業を行っているのである。話し合いは有効に活用したい。